

## アクティブラーニング

2月の当研究所の研究発表会では、国立情報学研究所の新井紀子教授に「ロボットは東大に入れるか？～比類なき技術革新時代の中で問われる教育の役割～」という記念講演をしていただいた。その中でも話されたように、先生の近著『コンピュータが仕事を奪う』を執筆されたきっかけの一つが、冬の三国を旅され、旧家の壁に掲げられた北前船が三国港に蟠集する一枚の写真との出会いであった。輸送手段が和船から鉄道に変わった時、船乗りや港の荷役、三国の町の商人は「どこへ消えたのだろう」と書かれている。

そして、20世紀後半にもコンピュータの導入により、切符を切る改札係員や電話交換手、タイピスト、植字工などの職が消えていったが、21世紀の情報科学は、無数の知的労働を代替するタイプの技術革新をもたらす。コンピュータがチェスや将棋の名人に勝ち、さらには英国や米国では入試の小論文採点において、人間が二人一組で採点するより、人間とコンピュータのコンビで採点した方が低コストでかつ精度が高いことが実証された。また、2020年の東京オリンピック時には日本語を話せばあたかも自分の声で話しているように翻訳してくれる簡単な機器の登場を予測されており、「『そこそこ』の知的作業はコンピュータによって急速に代替されつつある」として、いわゆるホワイトカラーがその職を追われる可能性を指摘される。

新井先生の論点は、アクティブラーニングが強調され、国際バカロレアが導入されようとする背景（要因）であり、またハーバード、MIT等のアメリカの有力校がウェブ上で無料講義を発信するMOOCや韓国済州島での「世界1%のグローバルリーダーを育てるアジア最高の英語教育都市」の建設との関係を私たちに考えさせる。

このような情報科学の急速な進化、コンピュータに対して教育はどう向き合うのか、そのヒントを119号の紀要のなかの論考・教育実践・記録のなかからくみ取っていただければと思う。新井先生はそのことを「意味」に「耳を澄ます」と表現されている。

福井県教育研究所 所長 中島 嘉文